

松原遺跡の縄文後・晚期土器

百瀬 長秀

はじめに

松原遺跡は千曲川右岸の自然堤防上に立地する。縄文時代後期前葉・堀之内式期の生活面の埋没後、弥生時代中期後半・栗林式の集落が営まれるまでの間、自然堤防上には生活痕跡は残らないが、その間に成立した河川跡・SD100の中から、弥生中期土器に混在して縄文時代後期～晚期の遺物が採取されている。報告書では浮線文期以降については詳述し、それ以外は河川の成立年代を推定する為に一部を紹介したが、長野盆地中央部では加曾利B式期～佐野式期の資料が少ないだけに報告漏れとするのも惜しく、土器を対象として紀要のページを借用することにした。もとより少量かつ散漫な資料で、器面も風化して整形などは観察できないほどだが、時期別に概要を示し、併せて沖積低地の利用の仕方も推測してみたい。

I 資料報告

1・2は3単位把手付磨消縄文深鉢。口縁部は屈曲して無文スペースとなり、屈曲部以下が主要な文様帶となって直線的な横帶文が描かれる。横帶文は縄文とミガキが1帯おきに配置され、光沢・非光沢のコントラストをつける。1は内面文がなく、2も同様だろう。1の把手は左右から寄せた斜め前向きの面が変形して真横を向き、8の字モチーフ起源の2ヶ1対の窪みは1ヶに省略される。頂部は大きくえぐられて中空状となり、把手根元の貫通孔に代わって表裏に浅い窪みが残される。中部高地の加曾利B2式並行期の前半は、八窪遺跡の2つのブロック出土資料で、後半は石神遺跡J1号住居出土資料で、それぞれ代表させることができる。八窪段階、石神J1段階と仮称するとして、2は八窪段階の、1は八窪段階と石神J1段階の中間的な様相だと言えよう。

3・4は素文平縁羽状沈線深鉢。3・4の外面は口端付近までケズリが顕著で、砂粒の移動痕跡をはっきり残したまま羽状沈線が描かれる。4の羽状沈線は細く鋭く、3は平たく、見かけは少々異なるが、両方とも器面への当たりが浅く、上段と下段は深く切り合い、密度は部分的には濃くて重複気味の箇所もある。第2種〔百瀬1999b〕の様相を残しつつも、第3種に分類すべきだろう。口端直下の内面に太い凹線が1条巡らされ、凹線の底は器面ともどもミガキが顕著である。口縁部の断面形は角張って口唇は平坦だが、外端部はケズリの限界が小さな稜をなす為、面取りされたような外観を呈する。3・4は石神J1段階の特徴を示すと言える。

9・10・33は波状縁羽状沈線深鉢。口縁部断面形は内面側が三角形に肥厚され、波形も大きく発達し、この系統の特徴が確立している。10の外面は無文でナデて仕上げるが光沢ははっきりしない。口端部の圧痕も欠落する。9の器面はケズリもしくは粗面で、羽状沈線は密だが重複はなく、幅はやや広いが断面は三角形なので第3種。口縁部内面の肥厚はわずかである。口

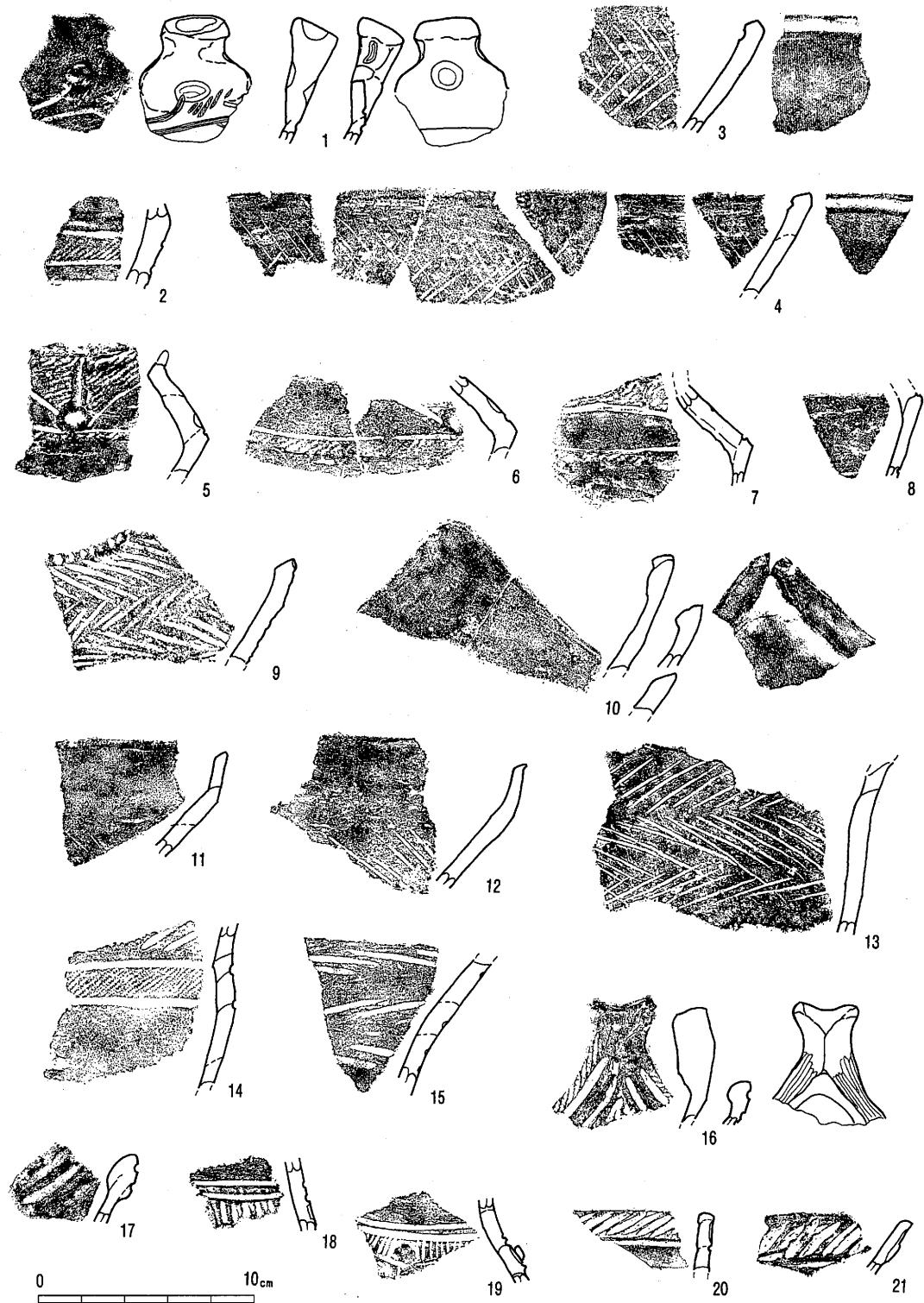
端部外面には圧痕が加えられるが、中部高地特有の口唇部斜圧痕ではなく、むしろ関東方面で発達する刻目に近い。33の口縁部の肥厚は波底部に限定される。体部上半はさらに二分され、上位はケズリの後で軽くミガキが加えられて半光沢をもつ。下位はケズリがなく、器面には砂粒が浮き上がり、ナデただけの器面に細く鋭い工具で幾分間隔の開いた羽状沈線を描く。ケズリはないものの、ケズリ可能な程度に器面が乾燥した後に施した羽状沈線だと推測し、第3種の範疇だと考える。羽状沈線は上段側が下段側を切っており、施工順序は異常である。波状縁羽状沈線深鉢の編年観は未確立な点が残る。9・29が八窪段階に溯らないことは断定できるが、石神J1段階に置かれるのか、それとも若干後出するのかはまだ判断できない。

5～8はいわゆるソロバン玉深鉢。口縁部の屈曲は成形の段階でくっきりとしつく、補強のために内面側に粘土帯が貼り足される場合があるのが観察できる。体部はケズリが顕著で、ナデられる部分もあるが、ケズリのまま放置する方が多い。ケズリは屈曲部先端まで及ぶので、屈曲の鋭さが強調されることになる。体部は横位の沈線で分割され、下位には羽状沈線などが描かれるのだろう。屈曲直上の1条横線との間は8を除いて縄文が加えられ、口縁部文様帶の下限を形成する。8はナデで、圧痕を加える個体はない。口縁部文様帶には上向弧線文が描かれる。5の単位文は浅い円形の窪みとそれに垂下する直線の組み合わせで、いったん深くえぐった後にユビなどでナデて浅い窪みに手直しする手法である。縦沈線もヘラ状工具で沈刻した後、幅広い工具でなぞっていて、窪みと同一の趣向である。6にも同様の浅い円形の窪みが残される。5と7は口縁端部が直立しそうだが、他の3点の端部形態は不明である。中部高地のソロバン玉深鉢は大塚達朗編年〔大塚1984〕に適合するまとまりかたとは言えない場合があり、波状縁羽状沈線深鉢以上に不明確である。石神J1段階以降であるとだけ言っておこう。

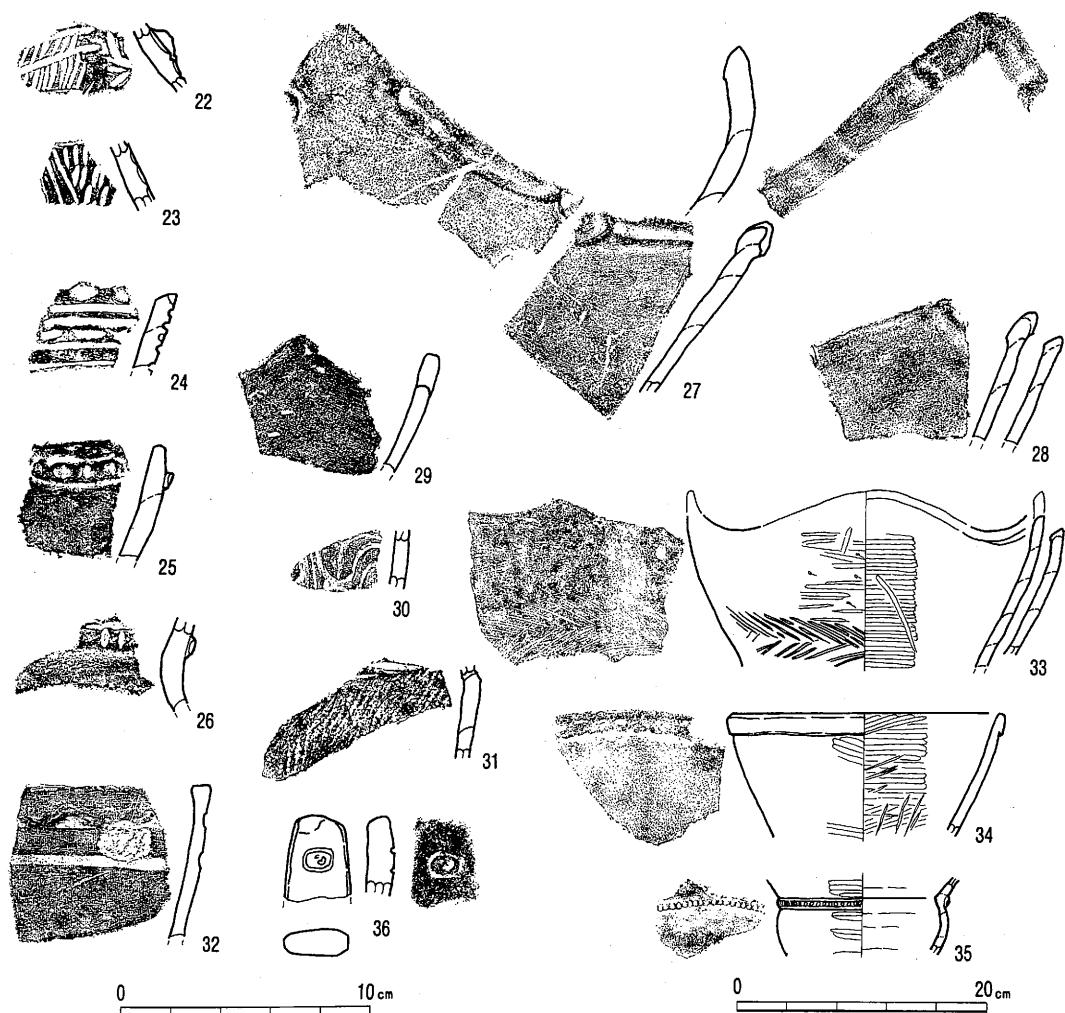
13～15は羽状沈線深鉢の体部。13は屈曲が緩くケズリ痕跡も残らないが、細く鋭い沈線を使用して重複箇所があり、上段・下段の切り合いも深い。器形などの特徴は第5種の段階でも後半に近いが、工具などは第2種の範疇に入りかねない。誠にアンバランスな様相で、わたしの羽状沈線の分類自体を否定しかねない個体だが、類例は全くないので例外扱いとし、石神J1段階以降と考えておく。14はナデで仕上げた器面に第5種羽状沈線を描く。体部下半の屈曲は緩く、屈曲を補うため2条沈線が描かれる。沈線間は通常はミガキを加え半光沢を残すのだが、14はLR1縄文を加えており、珍しい。内面には屈曲を示す稜が残される。「つ」の字文・直線文深鉢の体部だと思われ、加曾利B3式～高井東3式併行期のいずれかに位置づく。15は幅広で浅く短い沈線を水平に近い角度で描き、しかも各段の間隔が大きく開いている。第6種羽状沈線で、独立多段構成は清水天王山式に通ずる。器面には部分的ながらヘラ状工具のナデがはいり、部分半光沢といった様相である。ことによると初期の隆帶文土器の体部かもしれない。

11・12は屈曲する口縁部に無文帯が確立した平口縁深鉢。口唇部は内そぎ気味である。無文帯は一定の幅があり、半光沢をもつ。12の屈曲部以下はケズリ、11はケズリがない。羽状沈線は細く、間隔を開けて重複がないので第3種だろう。この2点はあまり類例を見ず、関東方面の高井東1式～2式に対応する可能性があるかも知れないが、判断は保留する。

16は波状縁羽状沈線深鉢で9・10の後裔。口縁部文様帶が確立し、口縁の屈曲も成立するだ



第1図



第2図

ろう。口縁部断面形は丸いが内肥は著しい。波形に沿った直線が3条以上描かれ、縄文とミガキが交互に配置される。波頂の把手の先端はやや張り出しており、魚尾状把手の祖形だろう。波底部には丸い瘤が貼付されそうだ。高井東3式の範疇だと考える。

17は波状縁深鉢で16の後裔。著しく厚い口縁部の内外面肥厚が特徴的である。口縁部の屈曲は喪失しているが、肥厚の結果屈曲と同一の効果が生まれ、肥厚部に口縁部文様帶が継承されている。2条の沈線は断面がつぶれ気味で、圧痕は付加されない。高井東5式よりも新しいが、後期末には下らない隆帶文土器である。羽状沈線はもはや喪失しているが、波頂直下には稻妻状沈線が描かれるだろう。

18~22は瘤付土器。胎土には雲母が含まれ、やや異なった印象を受ける。5点共別個体で、深鉢だけでなく、体部の張り出す器形も含まれる。水平帶状の文様帶には縄文は施文されず、19・22は鋭く細い短線に、20・21は鋭いがやや太い斜短線に、18は鋭くはない縦短線に置き換

えられる。18以外はいわゆるキザミ [会田容弘1997] で、肋線は観察できないが二枚貝の圧痕に似ている。恐らく短線帯以外は丁寧なミガキを施して、光沢・非光沢のコントラストをつけたのだろう。19と22には大きめの瘤が貼付され、その後、文様帯を分帶する水平沈線が描かれるので、瘤は割付の役割ももっている。高柳圭一編年 [高柳1988] の第III段階以降に属するとと思われ、関東編年では安行2式並行だろうか。会田容弘の編年観 [会田1997] では後期最末～晩期初頭に位置しよう。23も瘤付土器の可能性があるが、モチーフ内をさらに短い短線で埋めている。八日市新保式に多用される紡錘形の短線にも似ており、北陸方面との関連も考えられる。

27～29は隆帶文土器の波状縁深鉢で、17の後裔。口縁部文様帯が1条隆帶に退化した段階である。27は波形がまだかなり高く、口縁部内面側は丸く幅広く肥厚される。隆帶はすっきりと細く、付加される瘤も同様である。隆帶は波頂部よりやや下がった肩の辺りの内面口唇部からスタートし、隣の波頂部の同位置まで連なっている。隆帶文が途中で口端に取り付いてしまったので、波頂部が空き、そのためか鉢巻状加飾などがない。28は波形が著しく低下し、波頂部に小さな瘤が補われている。隆帶も失われ、口縁部内面のわずかな肥厚が、からうじて波状縁深鉢の系譜を示している。29は波状口縁というより平口縁に小さな板状の突起を貼付したに過ぎないかもしれない小形土器。波状縁深鉢の末尾に連なるか、あるいは無文精製土器なのか。27は中ノ沢中相 [百瀬1999a] で晩期初頭、28は中ノ沢新相、29は晩期中葉まで下がる可能性もある。

26・35は丸い体部がいったん屈曲し、口縁部が大きく開く鉢で、隆帶文土器の仲間だ。屈曲部に隆帶が貼付される以外に装飾はないだろう。隆帶はしっかりとつなでつけられ、縦圧痕が加えられる。中ノ沢中相以降だと考えるが、まだ変遷がつかめない器種である。

25は隆帶文土器の平縁深鉢。1条隆帶は貼り付けっぱなしで裾ナデはない。隆帶はところどころで口縁にすりつき、弧を連ねた形になるだろう。隆帶上には指圧痕がくっきりと施され、爪の痕跡が明瞭である。晩期前葉、中ノ沢新相に位置付けられる。

24は多条の沈線帯に短線を組み込んでおり、口端外面に指圧痕が付加される。位置付け不明だが晩期前半であることは確かだろう。32は佐野式の粗製土器で、2条の太く浅い沈線を唯一の装飾とする。このタイプは器壁が厚く口縁部も肥厚気味なのが本来の姿だが、32は薄手で肥厚もわずかである。やや新しい様相なのかどうか。31は亀ガ岡式の精製鉢で、口縁部が小さく屈曲し、口縁部文様帯にはモチーフは不明だが羊歯状文が描かれ、体部は縄文で埋められる。大洞BC式もしくはC1式であろう。30はモチーフが読めないが、えぐりの浅い三叉文が併用され、縄文はなさそうだ。晩期中葉あたりだろうか。34は口縁部を外側に折り返し、複合口縁とする関東や新潟方面の晩期の粗製土器である。風化が進んで判然としないが、縄文や撚糸文は施されないようだ。

36は土版の可能性がある土製品である。板状で側面は丸みをおび、表面に沈線で円を描き、円内にも何かモチーフがあるが、風化して不明である。裏面は無文だ。中部高地は土版の分布圏外だが、出土例が皆無ではない。エリ穴遺跡でかつて1点だけ出土しており、近年の発掘で

は土偶の顔面表現がある土版が話題になった。雁石遺跡では岩版の出土例がある。

松原遺跡河川出土の後～晩期土器は断片的ながら、堀之内式以降大きな空白期をもたずに断続的に出土している。土器のほとんどは風化が進んでいる。河川出土ならば当然かとも思うが、ローリングを受けて摩滅した土器はないので、遠距離を流されて来たのではない。自然堤防上のごく近い地点で河川に投棄されたと推測する。長期間にわたってこの付近が生活域として利用され続けられたこと、明確な構造を残さないような利用の仕方であること、そうした状態は長期間ほとんど変化がなかったことが推測できる。

II 低地遺跡の評価

中部高地全体として後期中葉～晩期中葉の遺跡は数少ない。長野盆地南部に限定して沖積地との関連をみれば、沖積地に立地する遺跡（沖積地遺跡）、沖積地に臨みつつも背後の山地や扇状地から離れない遺跡（臨沖積地遺跡）、沖積地に臨まず扇状地や段丘に立地する遺跡（扇状地遺跡）、山間地や高地に立地する遺跡（山間地遺跡）といった区分が可能だろう。

沖積地遺跡としては、松原遺跡を始め、更埴条里遺跡、屋代遺跡群（高速道地点、土口バイパス地点）、力石条里遺跡、川田条里遺跡などがあげられる。いずれも自然堤防上に立地し、遺構はなく、遺物も断片的かつ少量である。集落はもとより、一定期間の居住も考えにくい。地中深く埋没しており、よほど深い掘削事業でないと発見されなかつた遺跡である。類例は多いと推測されるが、今後新たに発見される可能性は小さいだろう。

臨沖積地遺跡は円光坊遺跡・石原A遺跡・保地遺跡、扇状地遺跡は宮崎遺跡・松ノ木田遺跡、山間地遺跡は宮遺跡・大清水遺跡が、それぞれ代表だが、それ以外の名前が上がらない。遺跡数は至って少ないのである。扇状地遺跡は集落になるだろう。規模はさほど大きくなないが、ほかに集落がない以上拠点的な集落だと考える。臨沖積地遺跡と山間地遺跡も同様だろう。沖積地遺跡はそれらの拠点からはさほどの距離を置かない。日常的な行動圏の範囲内に成立していると考えられるのである。

長野盆地の沈降作用と埋積作用の相互関係が背後にあるのだろうが、自然堤防と氾濫原との比高差があれば、自然堤防上の環境が安定して鬱蒼とした森林も成立し、伐開すれば前期末～後期前半のようにそこに集落を構えることもできる。だが後期中葉以降はそうしていないところを見ると、環境が異なっていたのではなかろうか。比高差が小さければ洪水の被害を受けやすく、後背地も含めて低木が生えた湿地帯になるのではないか。洪水の問題だけでなく、湿度が高く、夏場には蚊などの被害が多そうだ。植物質食料に特に恵まれる訳でもないだろう。後期中葉以降の自然堤防上は生活するには不向きな場所だったと考えたほうがよい。植物の栽培や管理は拠点的集落の間近でこそ実現可能だと推測すれば、低地遺跡の存在を何らかの植物栽培と短絡させるべきではないだろう。

沖積地遺跡の存在理由は、内水面漁労や水鳥の捕獲といった生業に関連するキャンプサイト、千曲川を利用した遠隔地との交通や交流に関連した一時的な逗留地などのほか、集落内の社会的緊張関係を緩和すべき一時的な寄留地などが考えられる。いろいろと意味付けを憶測する

よりも、縄文人にとっては沖積地遺跡も日常的な行動圏の範囲内だ、というだけで十分なような気もする。後期中葉～晚期中葉、千年近い間、状況に変化はないと考える。晚期後半には自然堤防上に土坑などが残され始め、遺物量も増加するが、利用の仕方の変化は社会的要因が大きく関与するのではなかろうか。

引用文献

- 会田容弘 1997 「東北地方縄文時代後期から晚期の土器装飾文様に見られる2種のキザミ」『古代』104
早稲田大学考古学会
- 大塚達朗 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』埼玉県立博物館
- 高柳圭一 1988 「仙台灣周辺の縄文時代後葉から晚期初頭にかけての編年動向」『古代』85
早稲田大学考古学会
- 百瀬長秀 1999a 「中ノ沢式土器の再検討」『長野県考古学会誌』89 長野県考古学会
- 百瀬長秀 1999b 「離山遺跡羽状沈線文土器の編年観」『長野県考古学会誌』90 長野県考古学会